

EternalStar 3

エターナルスター

C b i k a e s Y u k i

綾瀬麻結

Mayu Ayase

Eternity



エタニティ文庫

目次

Eternal Star 3	5
マイ、スイートラブ	307

Eternal Star 3

プロローグ

——大阪、八月。

鈴木千佳は流れる景色を眺めていた。外は茹だるような暑さだが、新幹線の車内はエアコンが効いていて、涼しい環境が保たれている。

だが、千佳の軀は異常なぐらい火照っていた。その瞳は潤み、頬には幾筋もの涙の跡がある。

東京を離れることためらいはない。快適だった一人暮らしをやめるのも、東京本社から大阪支社へ出向するのも自分で決めたことだから。

だが、たった一つだけ残念で堪らないことがある。数週間前まで付き合っていた水嶋優貴と、出発前に会えなかったこと。彼に別れを告げられたが、何故、優貴に相談もせず一人で大阪へ行くことを決めたのか、もう一度だけ会ってきちんと説明をしたかった。

二人の未来は、再びどこかで繋がると信じている。だからこそ、優貴と会ってから東京を発ちたかったのに、それは叶わなかった。

千佳は、どうやって希望を持てばいいのかわからなくなっていた。

同じ秘書室で働く同僚で、ずっと仲良くしてくれていた桜田に全てを話した時には、自分の気持ちも前向きになっていたというのに。

想いを押し込めるように唇を引き結ぶものの、すぐにわなわなと震え出す。膝に置いた手には自然と力が入り、いつの間にかギュッと拳を作っていた。

千佳は、妹の実佳が突然訪ねてきた時のことを思い出していた。

（わたしは、知らなかった。何故、実佳がたった一人で東京へ来たのかということ。目の前の問題しか見えていなかったから、気付いてあげることもできなかった……）

両親が入院してしまい、実佳はたった一人でどれだけ心細かったことだろう。だから、罰が当たったのかもしれない……。優貴以外の男性にときめき、結果、恋人を失うはめになったのだから。

大阪へ向かう新幹線の自由席。自分の愚かさに、千佳はたった一人で涙を流していた。

第一章　そして、タカラが零れ落ちた……

「じゃ、行ってくるね」

今日から、水嶋グループ大阪支社での仕事が始まる。初日ということもあり、千佳は家を出る時から少し緊張していた。

「千佳……、ご飯ぐらい食べていったら？」

「ご飯と聞いただけで、胸がムカムカしてきた。吐き気さえ覚える。それを極力無視してハイヒールを履き、スカートについた埃を払うと、千佳は上がり框かまどから腰を上げた。ゆっくり振り返って、心配そうに見つめる母へ視線を向ける。

「ごめんね。食べた方がいいのはわかってるんだけど……まだ胃の調子がおかしいみたい」

千佳は、軽く胃を摩さすりながら顔をしかめた。

「病院へ行ったら？　ちよつと……長すぎるわ」

「うん。だけど……理由はだいたいわかっているの。東京を出る前から、体調が悪かったし」

母は、千佳が優貴と別れたことを知っている。大阪へ着いてから何気なく優貴のこと

を訊きかれ、そのことを素直に告げたからだ。

どうして別れたのか理由は訊きかれなかったが、その影響で千佳の体調が優れないと薄々感じ取っているのだろう。だから、この日も曖昧に答える千佳を追及しようとはしなかった。

「それなら、これを持っていきなさい」

母が差し出したのは、スパウト付きパウチだった。手軽に栄養補給ができるゼリーが入っている。時間がない時は食事代わりにもなるので、千佳も東京では重宝していた。

「ありがとう、お母さん」

母の愛情を感じながらそれをバッグに入れると、千佳は面おもてを上げて背筋をまっすぐに伸ばした。

「じゃ、いってきます！」

「いってらっしゃい。気を付けてね」

「お姉ちゃん、いってらっしゃい！」

ダイニングルームで朝食を取っている実佳の声が、玄関まで聞こえた。母と目を合わせて笑みを交わすと、千佳はドアを開けた。

外に出ると、日射しが容赦なく降り注ぐ。その眩しさに、千佳は思わず目を細めた。蝉せみの鳴き声も朝から元気なので、今日もいい天気になるのだろう。

「今日から始まる新しい仕事に向き合うために、千佳は大きく深呼吸を三回繰り返した。よし！」

「気持ちを入れて自分を奮い立たせると、そのまま駅に向かって歩き出した。

「鈴木千佳です。皆さんにご迷惑をおかけしないように頑張ります。いろいろとご指導よろしく願います」

これから共に働く秘書たちの前で挨拶すると、温かい拍手で迎えられた。

それからの数日は、秘書室内での動きを頭に叩き込んだ。いろいろと親身になって教えてくれたこともあり、何とか一日一日を過ごすことができた。

そんな時、本社社長に初孫が誕生したというビッグニュースが社内を駆け巡った。

（亜弥さんと康貴さんの赤ちゃん、無事に生まれたのね。良かった！）

優貴の弟である康貴と、その妻の亜弥に、千佳は心の中で何度もおめでとうと告げた。初孫が誕生したことを受け、大阪に住む康貴夫妻のもとに、水嶋一族が総出で訪れるという噂が千佳の耳に入った。

もしかしたら、その時に優貴も大阪支社に顔を出してくれるかもしれない。

少し心を弾ませたが、結局顔を出したのは本社社長だけだった。

まだ、優貴に避けられているのだろうか？

そう思うとショックだったが、千佳はあまり深く考えないようにした。気持ちを切り替えて、亜弥のことを考える。

（九月に入ったら、わたしが大阪へ来たことを告げよう。数ヶ月前に会って以来、亜弥さんにはずっと連絡をしていなかったし）

そのことを忘れないようにするために、机の引出しに臨時に発行された社内報をそっと入れた。

社内報で水嶋家の近況を垣間見ることができたからか、千佳はほんの少しだけ幸せな気分浸れた。

だが、すぐに気を引き締めると、千佳は仕事モードに切り替えた。

それ以降、仕事場では仕事を、家に帰れば家族のことを第一に思って行動をした。一人つきりになると、優貴のことを思い出して涙する。

人目も憚らず、新幹線の中で涙を流したのが引き金となっているのかもしれない。

（感情が昂ぶってるのかな？ 優貴に別れを告げられてからというもの、わたしの体調も精神状態も不安定だし……）

家族が、千佳のことをとても心配していることはわかっていった。だからこそ、無理をしてもいつもの自分でいるように心懸けていた。

——九月。

いつの間にか八月も終わり、長い夏休みを終えた学生たちと電車で顔を合わせるようになった。

千佳の体調は悪くなる一方だというのに、時間だけはどんどん過ぎていく。体調管理すらできない自分を不甲斐なく感じながら仕事をしていたが、そんな千佳とは裏腹に、社内のお困りな気が少し活気づいているような気がした。

それとなく耳をすますと、大阪府岸和田市で毎年秋に行われる岸和田だんじり祭の話題で盛り上がっているようだ。岸和田だんじり祭は約三百年の歴史と伝統を持ち、日本を代表する祭の一つとなっている。町会の青年団に属している社員もいるので、毎年度の時期は社内も賑わうらしい。

だが、特にその話題に加わることもなく、千佳は今までと変わらない生活を送っていた。親しくしている社員もいなかったもので、この日も千佳は一人で社員食堂へ向かう。

相変わらず食欲がないまま無理をして食べ物を口に入れてみると、いきなり誰かが目の前のテーブルに乱暴にトレイを置いた。ガシャンと食器がぶつかり合う音にびっくりして、千佳は面を上げる。

そこには、茂庭が立っていた。今年の春、千佳に告白をしてくれた男性だ。

彼と一緒にいたことが優貴の誤解を招き、最終的には別れることになってしまった。

優貴が茂庭の存在を過剰なほど気にしていたことを知りながら、勝手に茂庭もいる大阪へと行くことを決めてしまった。それも、別れを告げられた原因の一つかもしれない。

その茂庭が、今は千佳の目の前に立って怒ったように睨んでくる。千佳と視線が絡まり合うと、何の断りもなく向かいの席に腰を下ろした。

「茂庭、さん？」

「俺、怒ってるんですよ」

彼は、Aランチのスタミナ定食を食べ始める。以前、東京で食事に誘われた時とは違って、豪快にご飯を頬張る姿に、千佳は思わず男を感じた。

性欲を刺激する「男」ということではない。その食事の量や、お腹を満たして午後からも仕事に励もうと頑張っている男の姿を見て、自然とそう思った。

千佳が呆然としていることに気付いたのか、彼は諦めに似た面持ちになった。口の中の物を全て呑み込んでからテーブルに手つき、千佳の方へ近寄るように前屈みになる。「俺が何を言っているのかわからない？ 三ヶ月前、一緒に食事をしようと言った段取りまでしていたのに、鈴木さんは急に東京へ戻ってしまった」

（そうだった。あの時は、茂庭さんと一緒に食事をするのは良くないと判断したよね。彼の誘い方が強引だったのもあるけれど、わたしは優貴だけを見つめていたと思ったから）

「……ごめんなさい」

あれからまだ三ヶ月ほどしか経っていないというのに、千佳には遠い昔のことに思えた。

（わたしは、茂庭さんから逃げるように名古屋へ向かって、そして優貴と会って……）

そこで過ごした濃厚な時間を、千佳はふと思い出してしまった。すぐに臉まかたをギョツと閉じて、その光景やこの身が覚えている官能を振り払おうとする。

「それじゃ、俺のために時間を作ってくれますよね？ 本社から来た俺たちは、似た者同士なんですから」

その言葉に目を開けて、千佳は彼を探るように見つめる。

似た者同士とは、どういう意味なのだろうか？

千佳は出向という扱いだが、茂庭は少し違う。茂庭は優貴によって左遷させられたのだ。それでも、二人の境遇は東京から来たという点については似ているかもしれない。

「茂庭さんは、どうして知ってるの？ わたしが大阪へ来たって」

「ああ、本社から来たってだけで、一瞬でいろいろと噂が」

茂庭は、箸で食堂にいる社員たちを指す。

「鈴木さんが……俺のところへ来て、大阪支社勤務になったことを知らせてくれるのを待ってた。でも、一向に何も言いに来てくれないから、業を煮やしたってわけで……」

そこで茂庭は一旦言葉を止め、少ししてから再び口を開いた。

「鈴木さん、食べないんですか？」

ちよっとしか手をつけていない海鮮リゾットに視線を落とし、千佳は軽く頷いた。

「最近、食欲なくて……」

ずっと気になっている下腹部付近を、そっと手で撫でる。優貴に別れを告げられてから、千佳は食欲不振おおいに陥り、胃のむかつきがおさまらなくなっていた。おそろく、心が不安定だから、軀からだの調子もおかしいのだろう。

そう思っていたのに、最近は突然下腹部が張ってキリキリと痛むことがある。ただの神経性だと言われそうな気もするが、ここまで不調が長引くのであれば、早めに病院へ行った方がいいのかもしれない。

（生理中でなければ、すぐにでも病院へ行くんだけど……）

軀の不調が続くのに食欲が出るはずもなく、千佳はそっと皿を押しした。

「まだ胃に優しいリゾットなら食べられるかなって思ったんだけど、やっぱりムカムカして食べられそうにないみたい」

「それじゃ、今週の土曜に美味しいものを食べに行きましょう！ 胃に優しいものを探しておきますから」

樂しそうに微笑む茂庭を見て、千佳も口元くちもとを緩めた。

彼のことは恋愛対象として見られないが、この率直な話し方は好きだった。
 (優貴のことを諦めたわけではないけれど、今のわたしには……こういう環境が必要な
 のかもしれない)

「ええ、行くわ」

「よっしゃー!」

軀からだで喜びを表現する茂庭を、思わず優貴と比較していた。優貴は、こんな風に喜びを表に出すことはなかった。傍目にわかる感情といえば、怒りだけ。

千佳の口は、自然とへの字になる。

(そういう優貴を怖いと思ったこともあったけど、それでも彼を愛さない日はなかった。ねえ、優貴。あなたは？ あなたは……もうわたしを愛していないの?)

親密そうに茂庭と話す千佳を、社員食堂の入り口から一人の男性が見つめていた。

他の社員と同様にスーツの上着を脱いでいるが、その顔を見れば一目瞭然。水嶋グループ会長の孫の一人で、本社社長の息子でもある水嶋康貴が千佳を眺めていた。

「……ちよつとヤバイんじゃないのか？ 優はいったい何をしてるんだ?」

康貴がボソツと呟いたが、その言葉は誰にも聞こえなかった。もちろん、千佳の耳にも届かなかった。

午後、千佳は頼まれた出張資料を手にエレベーターに乗り込んだ。

仕事をしていれば、他のことを考えなくてすむが、一人になると優貴のことが自然と頭に浮かんでくる。

千佳はそつと瞼まぶたを閉じて、脳裏に焼きついている優貴の顔を思い浮かべた。口数の少なかった優貴だったが、態度で瞳で愛情を示してくれた。

(もうあんな目で、わたしを見つめてはくれないの?)

その時、下腹にチクツと針で刺されたような痛みが走る。

「……っあー!」

そつとお腹に手を置いて、軽く摩さする。胃のむかつきに食欲不振、そしてこの下腹部の痛み。これは異常かもしれない。市販の薬を服用しているが、痛みがひく気配はなかった。生理痛に似た痛みが断続的に続くなんて、今まで一度も経験をしたことがない。

千佳は、茂庭との約束を変更してもらい、土曜日に病院へ行こうかと考えた。

だが、前回、約束を破り、逃げるように大阪をあとしたので、今回は自分から変更を言い出したくなかった。

(絶え間なく痛むわけではないから……大丈夫、よね?)

エレベーターを降りると、千佳は土地開発部へと向かった。

「失礼します。秘書室の鈴木ですが、土屋課長はどちらにいらっしやいますか?」

入り口近くのデスクに座る男性に訊ねる。

「ああ、たつた今急いだ様子で一階へ行きましたよ」

「一階へ？ 十四時まではこの資料を届けるようにと言っていた土屋課長が？」

「すぐに戻ってこられます？」

「どうだろう？ そのまま会議室へ直行するかもしれないな」

千佳は、顔をしかめた。時間を指定してきたということは、今日必要な書類ということになる。もし時間までに渡せなければ、きっと大変なことになるだろう。

土屋課長を、一階で捕まえた方がいいかもしれない……

「わかりました。わたしも一階へ行ってみます。もし、行き違いになりましたら、秘書室の鈴木が来たと伝えていただけますか？」

彼が頷くのを見てから、千佳は急いでその場をあとにした。

エレベーターのボタンを押すと、タイミングよく扉が開く。それに飛び乗り、一階のボタンを押した。

（どうして土屋課長はわたしの約束を放り出すほど急いでロビーへ向かったの？）

扉が開くと同時に、千佳はロビーに向かって歩き出した。周囲を見回し、目的の人物を探す。窓際に置かれた応接セットには、それらしき人物はいない。観葉植物の陰にも、奥に設置された小型ロッカーのところにも。

キョロキョロと見回しながら、千佳は中央にある受付カウンターへと向かった。歩いていくにつれ、受付の女性の姿が大きくなってくる。エントランスが見渡せる場所まで来たところで、千佳の足はピタリと止まった。

「えっ!？」

心臓がドクンと跳ね上がる。

（嘘……。あれは、優貴っ!？）

千佳の足は、床にピタッと張りついたように一步も動けなくなった。

突然のことに胸が痛くなったが、優貴が表情を和ませて誰かと話している姿を見ていただけで、胸がトクントクンと早鐘を打ち始めた。心だけでなく軀からだも彼を愛していると知らせるように、千佳の軀がどんどん火照ほてっていく。

（あれは、絶対に優貴よ。弟の康貴さんではないわ。わたしの心が、軀が……あれは優貴だと告げている！）

優貴に別れを告げられて以来、こんなにも幸せを感じたことはなかった。千佳は目をキラキラと輝かせ、口元を統はたはせながら優貴を見つめ続けた。しかも、探していた土屋課長が、優貴の側にいる。

（土屋課長に資料を渡すために、優貴の側にいける！ もしかしたら、優貴から声をかけてもらえるかもしれない！）

胸の高鳴りを抑えきれないまま一步前へ踏み出そうとした途端、土屋課長が少し立つ位置を変えた。愛しい人に会える喜びで、幸せそうに微笑んでいた千佳の表情が、一瞬にして凍りついた。

(……えっ?)

見たことのある女性が優貴に腕を絡ませて、ぴったりと寄り添っていた。優貴はそれを嫌がりもせず、千佳にもあまり見せたことのないような優しい笑みをその女性に向けている。

優貴の隣にいる女性は、千佳も名古屋で会ったHKコーポレーションの宝来夏希。優貴を狙っているとホテルの化粧室で宣言していた光景が、すぐに千佳の脳裏に浮かんだ。

(胸が痛い。……お腹もキリキリと痛い!)

千佳は、ブラウスの胸のあたりをギュッと片手で握った。ドロドロとした醜い嫉妬が湧き起こり、それが軀の中で渦巻き始める。

「……っ!」

悲痛な呻き声を漏らしながらも、千佳は恋人同士にしか見えない二人から目を逸らすことができなかった。

名古屋では、優貴は夏希を取引相手の一人として扱っていた。

だが、今の優貴は全く違っていた。普通なら人目のある場所で、あんな風に堂々と女

性に腕を絡ませるようなことはしない。

にもかかわらず、夏希の腕を振り解かないということは、つまり二人の関係は……

その時、土屋課長が千佳の方へ歩き出した。続いて、優貴と夏希も歩き出す。

優貴はまだ千佳の存在に気付いていなかったが、側にいた優貴付きのアシスタントの柳原が千佳の姿を認めたようだった。柳原が何かを耳打ちすると、優貴の軀が一瞬で強ばる。触れ合っている腕から異変を感じ取ったのか、夏希が窺うようにチラッと優貴へ視線を向けた。

「ああ、鈴木さん! すまなかったね。ロビーまで持ってきてくれたのかい?」

「……はい」

脂汗が額や背中を流れるのを感じながら、千佳は土屋課長の方へ軀を向けた。面を上げられず、足元から五十センチほど離れた床をジッと見つめる。

千佳の足は床に張りつき、思うように動けない。しかも、拒絶反応を示すように、軀のあちこちが悲鳴を上げていた。

「どうしたんだい? 何やら、具合が悪いようだが……」

「いえ、大丈夫です。あの……これ、全て中に入っております」

千佳は、どうにかして課長に封筒を差し出すことができた。

「ありがとう、本当に助かったよ。それじゃ、また何かあったら秘書室に連絡を入れる

から」

「……はい」

千佳は、ぎこちない動作で深々と頭を下げた。

目の前を土屋課長の足が通り過ぎ、続いて優貴の足とピンヒールを履いた夏希の足が視界に入る。

（優貴！ お願ひ、一言でいいから……わたしに声をかけて！）

そう願ったのに、優貴はためらうこともなく千佳の横を通り過ぎていった。

ガタガタと震える軀からだを抱きしめたい思いに駆られたが、千佳はそれを堪こらえてゆっくり頭を上げた。

「鈴木さん、本当に大丈夫？」

そこには、心配そうにこちらを見る柳原がいた。

東京では、優貴に会わせてと、何度も柳原に詰め寄った。だから、彼は全てを知っている。優貴と千佳は別れたが、それは合意の上ではなく、千佳が一方的にフラれてしまったのだと。

それもあるから、愛する男性が他の女性と仲睦まじくしている姿を見て、千佳がショックを受けていると思っただろう。

（もし、こうやってわたしを心配してくれたのが優貴だったら……）

「……はい」

か細い声で、千佳は応えた。

「柳原！ 何をしてる！」

優貴の怒号が、ロビーに響き渡る。

「行って、ください。早く……」

懇願するように千佳は囁いた。それでも柳原は心配そうに千佳を見つめていたが、再び優貴の怒号が響くと踵かかとを返して足早にエレベーターホールへと向かった。

それから何分経っただろうか？

優貴たちが去ってからも、千佳はずっとその場に立ち尽くしていた。断続的に襲ってくる下腹部の痛みに顔をしかめて、そっと汗を指の腹で拭う。

その時、再び爆弾が千佳を襲った。

「さっき、次男の横にいた女性が……もう一人側にいた年配の男性に話していたのを聞いたんだけど、近い将来、もっと顔を合わすようになるって言ってたわよ。次男と一緒に挨拶に伺うとか。それって、結婚よね」

受付の女性の言葉が凶器となり、千佳の頭を思い切り殴りつけてきた。あまりの痛さに、目の前がチカチカする。さらに、耳の奥ではガンガンと音が反響し、周囲の音が全く聞こえなくなった。

しかし、千佳に聞こえてくるのは、エコーがかかったようないろいろな人の声。そのせいで、それほど事態が緊迫しているようには聞こえなかった。

バタバタと人が駆け寄る音が響く。

「事件ではないわ！　すぐに清掃員を寄越して、この場を片付けるように指示を！　そして……秘書室に連絡を。鈴木が倒れたので、救急車で運ぶと伝えてちょうだい」

「はい、わかりました」

次は、遠ざかる足音が耳に届く。

「お願い……、もうこれ以上出血はしないで！」

（出血？　わたしが？　……どうして？）

再び激痛が走り、千佳は朦朧としながら身を振った。

「ううっ……」

誰かが、千佳の首に手を当てている。女性の優しい囁きが耳に届くものの、何を言っているのかさっぱりわからない。どういった状況なのか頭の中を整理しようと思っても、貧血を起こしたように目が回って何も考えられなかった。

「いったい、何があったの？」

千佳の額を優しく撫でてくれるその感触に、何故か癒しを覚えた。

もっと触れて欲しいと願ったその時、救急車のサイレンが耳に入ってきた。しばらく

すると、その音が止まり、ゴムがキュッと鳴る音と共にキャスターが回転する音が聞こえてくる。

「医師の渡辺です。克蘭ケは二十代前半の女性。おそらく……」

（渡辺って……。もしかして、医務室の渡辺女史？）

そこで一瞬渡辺の音が聞こえなくなったが、再び千佳が理解できるぐらいの音が響く。「出血が酷いので、専門の医師に診ていただけるように手配していただけますか？」

「わかりました」

いきなり千佳の軀が浮き、何かに乗せられた。ガチャガチャという音が聞こえると、再び軀が上に上げられる感覚がする。すると、いきなりそれが動き始めた。振動が軀全体に響き、再び激痛が襲ってくる。

ドアがバタンと閉まる音が何度か聞こえると、いきなりサイレンが鳴った。そこで初めて、千佳は自分が救急車に乗っていることに気付いた。

（助けて……もらえるのね。わたし……）

その時、誰かが千佳の手を握った。

「頑張つて！　大丈夫……大丈夫だからね！」

朦朧としていた千佳だったが、暗雲の切れ間から、暖かな陽が射すのがわかった。その光こそ、千佳の手を握ってくれている渡辺女史。千佳はその光を掴むために、力の出

ない手でその手を握り返す。

(離してはいけないのよ……。この手を……)

「あともう少しよ……。鈴木さん、頑張つて！」

誰かに縋ることができて安心したせいか、千佳はそこで意識を手放した。それからどれぐらいい経ったのだろうか。

突然軀が上下に揺られて、千佳はゆっくりと意識を取り戻し始めた。バタバタと側を走る足音、キャスターが回る音が、再び千佳の耳に届く。

だが、この時も千佳は目を開けることができなかった。下腹部を襲う激痛のせいで、何も考えられない。

そんな千佳の身に、さらに激しい痛みが襲いかかってきた。

(痛ッ！……わたしの身に、いったい何が起こってるの？ ああ、早く助けて!!)

刃物で切り裂かれるような強い痛みが、千佳に襲いかかる。自由に動かせない軀を振るように、ただ呻き声を漏らす。

すると、突然遠くから女性の声が聞こえてきた。スピーカーから流れるような、くぐもった母の声も。何を言っているのか、はっきりとはわからない。わかるのは、母の声がいつもと違っているということだけ。

意識が朦朧としているにもかかわらず、遠くの方で話しているその声音が、何故か千

佳をととても悲しくさせた。

そう思ってしまうのは何故なのだろうか。

その理由を考える間もなく、千佳は再び眠るように意識を失った。

——数時間後。

まどろみから覚めなくなかったが、遠くの方で千佳の名を呼ぶ声が聞こえてきた。何度も何度も呼ばれているうちに、自然と意識が覚醒し始める。

同時に、先程とは違う痛みが下腹部だけでなく軀全体を襲った。

(痛い……、軀が痛い！ どうしてこんなに痛いの?)

「千佳？ ……目が覚めた？」

自らの意志の力ではどうにもできないほど重たい瞼を、千佳は何度も押し上げようとして失敗した。それでも励ましてくれる声に助けられ、時間をかけてゆっくりと目を開ける。

「千佳……大丈夫？ 具合は？」

その心配そうな声は、母のそれだった。何とか焦点を合わせると、千佳の目に髪の毛の乱れた母の姿が飛び込む。母は目を潤ませながら千佳を見つめており、いつもは朗らかに微笑んでいるその口元は強ばっていた。

「……わたし、いったいどうしちゃったの？」

一度験を閉じ、カラカラになった口内を何とか潤そうとしたが何故か唾が出てこない。それを訴えるように、千佳はゆっくりと目を開けた。

「喉が、……渴いたわ」

その言葉に、母は水で濡らしたガーゼを千佳の唇に当てる。

（どうして、わたしに水を飲ませてくれないの？ それに、ここはどこ？）

千佳の視界に、白い天井と点滴が飛び込む。消毒液の匂いが鼻腔を擦ったことで、病院のベッドに横になっているのだとわかった。

でも、どうして病院のベッドにいるのだろうか？

「わたし……」

「覚えていない？ 会社で倒れてしまったことを」

千佳は、力の入らない手でギョツと拳を作った。

「……覚えて、る。わたし、急に……お腹が痛くなって」

「その場に居合わせた会社のお医者さんが、すぐに救急車を呼んでくださったのよ。だから、千佳はこうして無事なのよ」

（無事？ 何が無事だというの？ わたしの身に、いったい何が起こったというの？）

「わたし、どこが悪かったの？ もしかして、盲腸だった？」

頭を少し動かして、枕元にいる母の顔を見つめる。視線が絡まった瞬間、母の目から涙が零れ落ちた。それが何を意味するのか訊きたかったが、千佳はどうしても訊けなかった。母がすぐに涙を拭い、意を決したように千佳の顔をジッと見つめたからだ。

どれぐらい見つめられたのかわからない。何かを見極めようと、母はただ千佳の表情を探ってくる。

「お、母さん？」

張り詰めた緊張に耐え切れなくなり、千佳は母を促すように声をかけた。

「……ちゃんと話すわ。あなたは、きちんとわかるまでそのことばかり考えてしまうとと思うから。お医者さんから言われたことを、そのまま話すけれど、自分を見失わずに聞いてね？」

（自分を見失わずに？ ……ええ、もちろん！ わたしの軀がいったいどうなったのか。この痛みは、盲腸だったのか。きちんと知りたいもの）

千佳は、ゆっくりと頷いた。下腹部の痛みとはまた違う痛みが軀のあちこちを襲っているが、それでも真実が知りたい。

母は深呼吸をすると、点滴をしない方の千佳の手をギョツと握った。

「千佳はね……救急車で運ばれて、つい三十分前に手術室から病室へ戻ってきたばかりなの」

手術をしたせいでこんなにも軀が痛むのだとわかり、千佳はホッと安堵の息をついた。
 「やっぱり、わたし……盲腸、だったのね」
 そう呟いた千佳に、母は小さく頭を振る。

「千佳……あなたは妊娠していたのよ」

「妊娠？ わたし、が？」

（まさか……そんなはずはない。だって、だって……わたしは！）

千佳は、母の手を強く握り返した。

「……生理があつたのよ？ お母さんも知ってるでしょ？ だから、わたしが妊娠して
 いたはずがないわ」

「でも千佳、毎月きちんとあつたわけじゃないでしょ？ 生理がない月もあつたりと、
 周期がバラバラだったじゃないの。社会人になる前に、一度お医者さんに相談しに行っ
 たことを忘れた？」

忘れてはいない。毎月生理が来るようにピルを服用しようという話があつたが、あま
 り気にしていなかったから通院も途中でやめてしまった。

「でも、きちんと生理があつたわ」

母は、千佳の手の甲をそっと撫でる。

「お医者さんが言うには、その出血は……異変だと知らせてくれてたんですって」

「異変？ 異変って何？ わからないわ」

引き攣るような痛みに千佳は顔を歪めながらも、きちんと訊こうと母だけに意識を向
 ける。

「妊娠していたけれど、それは普通の妊娠ではなかったの。子宮外妊娠だったの」

（子宮外妊娠？ わたしが？）

数年前、まだ高校生だった頃に学校の授業で習ったことがある。本来、受精卵は子宮
 に着床する。普通はそれで妊娠したことになるが、受精卵が誤って卵管に着床してしま
 うこともある。そこに着床しても妊娠の兆候が出るので、もし軀の異変に気付いたら早
 めに診察を受けるようにと、保健体育の先生が言っていた。もし、受精卵が卵管に着床
 した場合、早急に手術を受けなければならぬからと。

忘れかけていた知識を引っ張り出した途端、千佳の唇が震え始めた。

「お母さん、わたしの……卵管は破裂したの？」

「開腹した時、既に卵管は破裂して……危ない状態だったの」

（つまり、わたしの片方の卵管は……）

「安心しなさい、千佳。もう片方は残ってるのよ。だから、あなたは好きな人の子供を
 産めるわ。悲観することなんて全くないのよ」

千佳は母を見つめていたが、やがて白い天井へと視線を向けた。

(でも、わたしの生理周期は乱れている。それに、片方だけということとは、妊娠しにくくなったことになる)

千佳の唇が、わなわなと震え始める。

「わたし、バチが当たったのか？ 優貴から愛されていたのに、愛想を尽かされるようなことをして彼の愛を失ってしまった。新しい生命を宿していたのに、これもわたしのせい……」

「それは違うわ、千佳！ 子宮外妊娠は、誰のせいでもないのよ」

母の言葉に、何度も心の中で頭を振る。

(母体であるわたしもつとしっかりとっかきしていれば、受精卵は子宮に着床していたかもしれない。そうすれば……優貴との子供を、この腕に抱けたかもしれない！)

「お母さん、……優貴さんに連絡しようか？」

「やめて！ 彼には知らせないで。妊娠したことも手術を受けたことも、何一つ言わないで。彼には……知られたくないの」

千佳の目から涙が溢れ、目尻からこめかみへと伝い落ちていく。

今さら優貴に妊娠していたと言っても、どうなるものでもない。大切なタカラを失い、女として傷を負った今、優貴との復縁を望むのはあまりにも不相応すぎる。

それに、優貴には婚約者がいる。千佳が二人の間に割り込んで、彼を奪い返すことは

もうできない。

(わたしは決めていたから……。優貴とは、彼が結婚するまでのお付き合いだと)

頭ではわかっているのに、心が千佳の言葉を拒絶する。胸が熱くなり、そのまま張り裂けそうなほどだった。

千佳は、優貴を本当に失った。彼との子供まで。強烈なダブルパンチに、千佳は静かに涙を流すことしかできなかった。

「わかったわ。千佳がそう望むのなら……お母さんは何も言わないから」

千佳の心がわかっていいるのだろうか？

母は千佳を慰めるように、ずっと優しく手を握り締めていた。

——数時間前の東京、水嶋グループ本社秘書室。

『わたし、優貴を忘れてはいない。今でも、彼のことだけを想ってる。でも、知らない土地で機械のように働いている時に、東京で知り合った茂庭さんと再会したの。彼と話をするだけで、少し気分が晴れたわ。わたし、茂庭さんと食事をする約束をしたの。優貴のことばかり考えていると、自分がダメになりそうだから。もちろん他の男性を探す

という意味ではないのよ。ただ……わたしが気晴らししたかっただけなの。菜乃さん、こんなのもってダメかな？」

「ファイティ・ファイティよね……」

昼食後に千佳から届いたメールを読んだ桜田は、腕を組みながら唸った。

「何がですか？」

資料を配ろうと移動していた後輩の永長が、桜田の呟きを聞きつけて背後から訊ねた。聞いかけられるようにこちらを見る永長の瞳を見返ししながら、桜田は自分と永長との関係を考えた。

桜田にとつて永長は良い後輩で仕事仲間。二人で食事をしたとしても、付き合っている彼氏にきちんと話せば特に問題は無い。二人は一度辛い別れを経験したことで、昔よりもさらに強い絆で結ばれているから。

(でも、千佳は違う……)

一人で考え込む桜田に口を出そうとはせず、永長は手に持っていた資料をそつと桜田の机の上に置いてその場を去った。

他の秘書にも同じ資料を手渡している永長を気にすることなく、桜田は目を瞑る。心が極限まで張り詰めているのではと、千佳のことが心配で堪らなかった。

もし、すぐに資料に目を通せば、千佳に連絡することができたのに……

——三時間後。

「ええ？ ……ちよつと永長くん、これはいったいどういうことなの!？」

つい数時間前に渡された資料を振りかざして、桜田は永長に向かって大声を出した。

今やってきた仕事の書類を、知らず知らず上に重ねていたので、桜田は今までその資料に気付けなかったのだ。

桜田と永長に先輩たちからの鋭い視線が向けられるが、そんなことには構っていられない。

「何ですか？」

永長は手帳を手にして立ち上がると、心配そうに眉をひそめながらこちらに歩いてくる。

「コレよ!」

永長は、桜田が指す部分を覗き込む。それが何かかわかると、彼はホッと息をついて肩の力を抜いた。

「ああ、それですか。午前中、上から回ってきたものをコピーをして、午後一番に配布したものです」

「ご、午前中!？」

「はい」

桜田は、千佳からのメールを読んでいた時に、永長が何かを配っていたことを思い出した。

「こうしてはいられないわ！」

メールで連絡するよりも、直接千佳と話をした方が断然早い。

桜田はすぐに携帯を手に取り、千佳の携帯番号を表示した。千佳が出てくれるのを待とうとした時、電波の届かないところにあるか、電源が入っていないため、かかりません……というアナウンスが流れる。

電源を切っているのだからかと思いつながらデスクの上に携帯を置くと、次は目の前にある受話器を取り上げて大阪支社の短縮ボタンを押す。

どうか間に合いますように……と祈りながら、桜田はコール音に耳を傾けた。

『水嶋グループ大阪支社です』

(しまった！ 直通で秘書室へかければ良かったのに、わたしったら)

思わず舌打ちをしそうになったが、桜田は舌を噛むようにしてそれを押し止める。

「わたくし、本社秘書室の桜田と申します。秘書室の鈴木をお願いします」

『少々お待ちくださいませ』

(早くっ！ 早く、繋がって！)

受話器を握り締めながら、桜田は目の前にある資料を凝視した。

♪水嶋優貴氏、本日本阪支社へ立ち寄り……♪

その下には、その業務の関連資料の収集について補足が書かれている。この件に関して何も言われなかったということは、先輩たちが資料をまとめたのだろう。

後輩ができた今でも、桜田にはまだ任せられないということ。もし、任されていたら、すぐにでも千佳に知らせることができただろうに。

自分の不甲斐なさにイライラしていた桜田だったが、そこで意識を受話器から流れてくる音に移した。

そういえば、ずっと保留音が流れている。

(どういうこと？ どうして繋がらないの？)

水嶋グループでは、電話の取り次ぎは迅速にするように言われているので、こんなに待たされることは滅多にない。

何かがおかしい……と思った時、保留音が切れた。

「千佳!？」

『……申し訳ない』

「えっ?」

受話器から聞こえてきたのは、男性の声だった。

搬送された大城総合病院で、千佳は産婦人科の担当医師から子宮外妊娠について説明を受けた。

緩やかに進む下腹部痛、生理とは言い難い不正出血は、卵管流産の危険を知らせる一つの信号だったらしい。生理痛と間違う人もいるので、異変を感じた時点で診察を受けるべきだったと。

(……そうしなかったのは、全てわたしのせいね)

愛し合っていれば妊娠することは有り得るのに、自分に限ってそれはないと思ひ込んでいた。

もし、早期に発見できていれば、卵管の破裂だけは免れたかもしれないのに。

(赤ちゃんが、わたしに知らせてくれていたのに！)

千佳は、シーツをギュッと握った。

医師曰く、すぐに手術ができたのは本当に運が良かったらしい。もし、子宮外妊娠だと気付かずに病院をたらい回しにされていたら、生命の危険もあったという。

今回は、偶然にもその場に居合わせた渡辺女史のおかげで、スムーズに治療ができたということだった。千佳が流産しているかもしれないと救急隊員に告げ、産婦人科のある病院を指示してくれたらしい。

千佳はそつと下腹部に手を置き、赤ん坊ができた日を計算しようとした。

だが、計算しなくても、優貴に愛されたあの特別な日に命が芽生えたのだとすぐにわかった。彼と最後に愛し合ったのはあの日だし、何といってもあの夜は特別な交わりだったから。

(優貴と名古屋で愛し合った時のことは、今でも忘れられない。お互いを求めて、欲望のまま愛し合ったあの日の二人は、心も軀も一つになっていたもの)

だから、あの日……いつもと違った快感を得たのかもしれない。とても深く、とても神秘的だった二人のセックス。赤ん坊ができたのも頷ける。

(あの時、二人の気持ちは一つになっていた。でも、今の優貴は……もうわたしのことなんて好きでもなんでもない。二人に未来はないのだから、もう潔く優貴を忘れなければ……)

わかっているのに、そう思っただけで気持ちりが昂ぶってくる。それを抑えようと、千佳は目の前にあるベットポトルからグラスに水を注いで一口飲んだ。

とにかく、今は優貴のことではなく、退院後にすべきことを考えよう。

まず、赤ん坊の供養をする。腕に抱いてあげることができなかつたが、その魂が再び生を受け、この世に誕生することができるように祈りたかつた。

「こんにちは、具合はどう？」

突然、優しい声が病室に響いた。面を上げると、そこには大阪支社の医務室で働く渡

辺女史がいた。

「あっ、渡辺女史」

彼女は、支社内では「女史」という愛称で呼ばれており、男性社員のみならず女性社員からも好かれている。つい先日、大阪支社で働く男性と結婚したが、仕事場では以前同様旧姓の渡辺で通っていた。

「もう、大丈夫です」

水嶋グループは、女性の自立を応援してくれているが、下手に流産の事実を知られるとあとで大変な思いをするかもしれない。そう思った渡辺女史は、千佳が倒れたその時からずっと気を配ってくれていた。

さらに、産婦人科病棟で入院するはずだった千佳は、術後の経過が順調だということもあり、外科病棟に移っていた。それも、渡辺女史が担当医師にかけ合ってくれたおかげだった。

もし同じ職場の人たちがお見舞いに来た時、産婦人科では外聞が悪いと考えてくれたのだ。女性ならではのその心配りに、千佳は本当に感謝していた。

「そう？ それなら良かったわ」

渡辺女史はチラッと四人部屋の室内を見渡し、千佳以外の患者がベッドにいないことを確認してから口を開いた。

「秘書室からのお見舞いを持ってきたわ。単なる盲腸もち腸だから、見舞う必要はないと言っておいたの。それに女性だから……ガスが出たら恥ずかしいでしょって言ってね」
にこやかに微笑みながら、彼女はテーブルに封筒を置いた。そして、申し訳なさそうにノートパソコンを置く。

それは、千佳が大阪支社に来た初日に支給されたものだった。

「ごめんなさいね。盲腸だったら大丈夫だろうって言われて、コレを渡すように言われたの。もうすぐ退院するっていうのにな。でも、無理な仕事はさせないでと言っておいたから」

「ありがとうございます。わたしなんかのために、いろいろとお気遣いいただいて」「ううん、いいのよ。わたしの前で倒れたのも……何かの運命だったんでしょね」

渡辺女史が座ろうとしないので、手で椅子を示して促うながしたが、彼女は残念そうに頭を振った。

「休憩中に抜けてきたから、すぐに会社へ戻らないといけないのよ。ごめんなさいね。でも、また会えるわね。職場へ復帰したら、是非医務室へ立ち寄ってね」

手をポンポンと優しく叩かれる。千佳は感謝を示すようにその手を握った。

「ええ、必ず……。必ず伺います！」

「それじゃね」

渡辺女史は片足を後ろに引いて、入り口の方へ向かおうとした。エレベーターまで送るためにベッドから足を下ろそうとした千佳を見て、渡辺女史は大きく手を左右に振る。「いいのよ！ 入院中は安静にしていた方がいいわ」

朗らかな笑顔で微笑む渡辺女史の言葉に甘えると、千佳はベッドで軽く頭を下げて、その場から彼女を見送った。

病室に一人つきりになると、千佳はすぐにノートパソコンを開いた。大阪に来て以来、桜田とは欠かさずメールの交換をしていたが、千佳が入院してからずっと連絡を取っていない。

きつと、どうしたのかと心配しているだろう。

携帯からも確認はできるが、既に充電が切れており、桜田と連絡の取りようがなかった。母に携帯のアダプタを頼んでも、安静を第一にと言って頭を振るばかり。

途方にくれていた千佳にとって、このノートパソコンはまさに渡りに船だった。

パソコンの電源をオンにすると、すぐメールの受信を行った。予想していたとおり、桜田からのメールがずらりと並んでいる。

桜田には、何があったのか全て話そう。嘘をつけば、きつと悲しそうな表情を浮かべるに違いないから。

(彼女なら、わたしの話を受け止めてくれる。東京で全てを告白した、あの日のように)

千佳は、キーボードにゆっくりと手を置くと、連絡を絶ってから何があったのか、全て吐き出すようにキーを打ち始めた。

第二章 心の火を見つめ直して

——東京、水嶋グループ本社秘書室。

千佳が倒れたと知ってから、ずっとメールが途絶えている。できることなら、有給休暇を取って千佳のもとへ駆けつけたかった。

だが、それは叶わなかった。有給休暇届を出そうとした矢先、突然急を要する仕事で秘書室に持ち込まれたからだ。桜田にも仕事が振り分けられ、秘書室は大忙しだった。よほどのことがない限り、有給休暇は取らないようにとお達しが出る始末。

それも全て、千佳の元カレでもある水嶋家の次男が、予定していた資料とは違う書類を求めてきたからだ。

駆けつけてあげられないことを心で詫言ながら、桜田は千佳の携帯に電話をかけ続けた。今でも電波の届かないところにあるか、電源が入っていないため、かかりません……というアナウンスが流れる。それでも、毎日欠かさず連絡を取ろうとしているうちに、五日も経っていた。

(もう一度、大阪支社の秘書室に電話をして、千佳のことを訊こうかな？ でも、前回、

電話をかけてから時間が経ちすぎてる。もう仕事を理由には訊けないし……)

千佳のことが心配で堪らなかつたが、桜田のメールを見たら千佳の方から必ず連絡をくれると信じ、毎日メールの返信が届くのを待っていた。

ずっと信じて待ち続けたのが良かったのだろう。仕事を終えたあと、いつもどおりメールソフトの受信ボタンを押すと、待ち望んでいたメールが届いていた。

桜田の願いが、やっと叶った瞬間だった。

「きゃあ！ 千佳からやつとメールが届いたわ！」

秘書室に誰もいないのをいいことに、桜田は目を輝かせながら歓声を上げた。

「ほらね！ 千佳は、わたしのことを忘れてはいないわ」

笑顔でメールを読み進めていったが、想像を絶するその内容に顔面蒼白になっていく。

「嘘、でしょ？ 千佳、が……!?!」

千佳が何故手術をしなければならなかつたのか、その原因を知った桜田はデスクの上にある電話に手を伸ばした。何が起ったのか教えてくれるもの、千佳の今の状態についてはあまり書かれていないからだ。

携帯の充電が切れているということで、桜田は番号案内に電話をかけ、メールに書かれている大城総合病院の電話番号を教えてもらった。メモに書き留めると、電話を切つてすぐに病院へかける。

『大城総合病院です』

「そちらの外科病棟に、鈴木千佳が入院していると思うんですが」

『少々お待ちください。……はい、確かに入院されていますね。八〇七号室になります』
病室を訊ねたわけではなかったが丁寧^{ていねい}に教えてくれたので、桜田はお礼を言う^いと本題に入った。

「あの……すぐそちらへ向かうことができないんですけれど、鈴木の容体はどうなんでしょうか？」

『申し訳ありません。患者さんの容体は、ご家族以外の方にお話しすることはできませんです』

「でも、鈴木とは同僚でー！」

『大変申し訳ありません……』

何を言っても、聞き出すのは無理のようだった。

そこで、次は千佳の家族に連絡をしてみようと思った。受話器を取り上げて、人事部直通のボタンを押す。

呼び出し音が三回鳴ったところで、人事部と繋がった。

『人事部の吉川です』

「秘書室の桜田です。大阪支社へ出向中の鈴木千佳の実家の電話番号を知りたいんです

けれど」

『えーと、それは個人情報になるので開示することはできませんです。携帯では連絡が取れないでしょうか？』

桜田は、目の前のパソコン画面へ視線を向けた。携帯は使えないとメールに書いてあったとおり、千佳から送信されたメールのアドレスは携帯のものではなかった。

「はい……。どうしても無理ですか？」

『仕事上問題が起きて、どうしてもという場合は可能ですが、その際にも上司の判が必要になります。秘書課でいえば、秘書課秘書室室長と秘書課課長の判になりますね』

萎えそうになる気力を押し止めるように、桜田は空いた手で額を押さえた。仕事とは無関係なので、上司に判をもらうことは当然無理ということになる。

「そう、ですか……。わかりました。どうもありがとうございます」

受話器をゆつくりと戻すと、桜田は椅子に深くもたれた。椅子の背が大きく軋み、耳ざわりな音が響くものの、そんなことは気にもせず千佳のメールへ視線を向ける。

「ああ、千佳！」

右にも左にも動けないこの状況に、桜田は呻き声を漏らすことしかできなかった。

（千佳が苦しんでいた時、わたしは何もできなかった。次男が指示した資料を集めることに追われていたなんて……）

彼もまた、自分の子供を妊娠した千佳が大変な目に遭つてるとは知らず、役員室の室内で仕事に勤しんでいるのだろう。

倒れた時の状況、千佳の胸の痛み、元カレの態度……。驚愕して手が震えたその内容をもう一度読み直すと、桜田の目に涙が浮かんできた。

(愛し合っていたら、そういう関係になるのも当然。でも、結局はそのリスクは女が背負うことになる。千佳もそう！)

転がっているペンが飛び上がるほど、桜田は力強くデスクを叩いた。

「千佳のことだから、きつと隠れて涙を流しているに決まってる。周囲に迷惑をかけるように、必死に表面を取り繕う子だもの。その千佳が、今こうやって本音を打ちあけてくれてる。ああ……わたしは、友達としていったい何をしてあげられる？」

桜田は、両手で顔を覆った。桜田が今の恋人と一度破局した時は、血の繋がらない叔父が助けになってくれた。

千佳にも、そうやって助けてくれる人が側にいるだろうか？

別れた恋人とのことに他人が首を突っ込むのを、千佳が望んでいるかどうかはわからない。それでも、親友として何とかしてあげたいという気持ちが強かった。

桜田は、メールをジッと見つめる。

「二人はもう終わってる関係。だから……他人が首を突っ込んでもいいんじゃないの？」

このメールには、次男は既に別の女性と付き合ってるみたいなのが書いてあるし」

もし、その女性こそ次男の運命の相手なら、辛い思いをさせるかもしれない。

(でも、運命の相手だったら何を言っても関係ないわよね？ 結局は、その女性と結ばれる運命なんだから！)

自分が納得できるように、ただ言葉を並べているだけだとわかってはいたが、桜田は千佳のために何かをせずにはいらなかった。

「そうよ。千佳一人が苦しんでいいはずがないわ！ 二人がもう別れていて、今は自分の道を進んでいるとしても、千佳にどんなことが起きたのか彼もきちんと知るべきよ」

椅子を蹴るように立ち上がると、桜田は秘書室から飛び出した。誰もいない廊下を走り、勢いを緩めずその先を曲がろうとする。その時、いきなり人が飛び出してきた。

「キャッ！」

ぶつかりそうになると同時に、ヒールが絨毯に引っかかって前につんのめる。

「さ、桜田さん!？」

転びそうになった桜田を支えてくれたのは、後輩の永長だった。

「あっ、ごめんなさい。お先！」

「えっ？ ああ、お疲れさまでした……」

いつもと違う桜田の勢いに驚いたのか、永長は呆然として彼女の後ろ姿を見送った。

だが、その視線に全く気付かない桜田はエレベーターのボタンを押す。「上って……どこへ行くつもりなんだ？ 上の階は、先輩秘書たちしか行ったことのない管理職フロアだよな？」

永長の眩きも耳に入らないまま、桜田は目の前の扉が開くと、すぐにエレベーターに乗り込んだ。目的の階のボタンを押したその時、永長が足早に近寄ってきた。

「どこへ行くんですか！」

「頑張ってくる！ 千佳のために……」

桜田は永長に向かって力強く頷いてみせた。それが合図のように、二人の間でエレベーターの扉が閉まった。

「桜田さん、いったい……どうするつもりなんですか？ 千佳って……鈴木さんのこと？」

永長の眩きは静かなエレベーターホールに響いたが、当然桜田の耳には届かなかった。

目的の階に到着した桜田は、一般のフロアとは異なる豪華さに、思わず目を見開いた。緊張を押し隠すように、ゴクッと唾を呑み込む。

「ここが、管理職専用のフロア……」

桜田は、仕事ではまだ一度も足を踏み入れたことがない。仕事とは全く無関係な用事で、息せき切ってここまで上がってくることになるうとは、想像すらしていなかった。

ICチップが埋めこまれたネームプレートを指定の位置にかざし、桜田自身は使ったことのないパスワードをパネルに打ち込む。

（大丈夫！ 千佳だって、何度もここを通ったんだから！）

セキュリティを通り抜けると、桜田は前だけを向いて重厚な絨毯の上を歩いた。ドアに付いているネームプレートを、一つ一つ確認しながら歩みを進める。

やっと探していた名前が、桜田の目に飛び込んできた。そこで静かに立ち止まると、数回深呼吸を繰り返し、気持ちが落ち着いたところでドアを四回ノックをする。

「失礼します」

返事を待たずに重たいドアを開けると、桜田は周囲に視線を走らせた。アイランド形式に置かれているデスクに人はいないが、奥へ続くドアの近くに、書類を手に一人佇んでいる男性がいた。

「君は？ アポを受け付けた記憶はないが？」

その人を見下したような態度が、かえって緊張していた桜田を適度に解してくれた。これも全て、いつも傲慢な態度を取る叔父に鍛えられているおかげだろう。怒り肩になっていたが、ほどよく力が抜けて背筋が綺麗に伸びる。